

別記様式（第5条関係）

会 議 録

会議の名称	第12回福津市共働推進会議
開催日時	令和5年12月15日（金）午後2時00分から午後4時20分まで
開催場所	福津市役所 本館2階大会議室
委員名	（1）出席委員 嶋田 暁文、依田 浩敏、奥 弘子、小林 真理、富松 享一、中川 孝晃、三ッ橋美津子、山口 覚、山田 雄三
所管課職員職氏名	市民共働部長 香田 知樹 市民共働部地域コミュニティ課長 石井 啓雅 地域コミュニティ課市民共働推進係長 井上 真智子 地域コミュニティ課郷づくり支援係長 向井 恭子 地域コミュニティ課郷づくり支援係 折居 鈴香
議 題 (内 容)	・ 中間報告後の細部検討 ・ 「福津市みんなですすめるまちづくり基本条例」の概要について
	公開・非公開の別 <input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開
	非公開の理由
	傍聴者の数 1人
	資料の名称 ・ 次第 ・ 資料1 福津市みんなですすめるまちづくり基本条例、逐条解説 ・ 資料2 内容検討等に関する説明資料 ・ 資料3 条例と関連法令等の特徴 ・ 資料4 条例内容検討の方法 ・ ロジックツリー（当日配布） ・ 「課題解決のアイデア〇」の具体策（案）（当日配布）
会議録の作成方針	<input type="checkbox"/> 録音テープを使用した全文記録
	<input checked="" type="checkbox"/> 録音テープを使用した要点記録
	<input type="checkbox"/> 要点記録
	記録内容の確認方法 委員による確認
その他の必要事項	

審議内容 (発言者、発言内容、審議経過、結論等)

1. 会長あいさつ

2. 中間報告の細部検討

事務局

当日配布資料を基に説明。

ロジックツリー（当日配布）の方策に書いてあるアルファベットは、「課題解決のアイデア○」の具体策（案）（当日配布）の左側に振っているアルファベットと一致している。

○柱3の②について

会長

情報提供のあり方や魅力的な活動など、ロジックツリーに出てきている方策が抽象的である。情報提供のあり方の何がどう問題なのかはつきりさせる必要がある。

事務局

情報提供のあり方は、具体策の柱3のAにつながる。ロジックツリーの方策には、「情報提供のあり方」と簡潔に書いているが、具体策としては柱3のAに挙げている内容になる。

会長

「現役世代や子育て世代が活動者として参画していない」の具体策としてずれている気がする。

事務局

訂正する。

会長

「時間が合わない」という問題については、時間が合うような活動をしてもらうようにしていく。逆に言えば、どういった時間帯であれば、参加してもらえるかということを確認していくということであろう。

「1つに関わるとその他のことにも巻き込まれてしまう不安感がある」については、これだけやってもらったらいいいという限定的な関わりしろを作っていくことだろう。

「活動内容に関心がない」「活動に興味がない」については、魅力的な活動をしてもらうということだろう。

「イベント等での声かけが不十分」については、コミュニティ・オーガナイジングをもとに、一斉に100人集めようとせず、1人の人が5人に声をかけていき、20人が5人に声をかけることで100人集めるというような考え方があ

100人集めようとしたときに、1回で100人にチラシを配ったとしても人は集まらない。チラシを配って実際に来てくれるのは1%くらいだと言われている。そのため、個別に声かけをして、確実に来てもらうということをしていかないと、人はなかなか集まらない。1人が3人には声をかけるという風に手分けをして、人の集め方を変えていくことが大事である。面倒くさいと思うが、そういう面倒くさいことをしないと人は来てくれない。

「SNSの活用が不十分」については、協議会側に対して、例えばSNSを使えるように講座を開くというようなことだろう。

「協議会の役員になると負担が大きい」については、役員にならなくても良い方策を考えていく、限定的な関わり方をしてもらうということだろう。今は、協議会がやりたいことをやってもらう仕組みになっている。そうではなく、個人がやりたいこと、できることをベースにして、そこに協議会が乗っかっていくということが方策になってくるであろう。

「ハードルが高く感じている」とはどういう意味か。

#### 事務局

協議会の方たちが、他の団体や個人となかなかつながっていないという中で、つながる方法は分かるが、そこまでたどり着いていない。その原因はなぜかと言うと、つながるための行動に負担を感じている、抵抗があるのではないかという意味で書いている。

#### 会長

そもそも、なぜ抵抗があると感じるのか。その原因が分かれば手を打てる。ハードルが高いというだけで終わったら、ハードルを低くするというような抽象的な方策が出てきてしまう。しかし、どういった団体があるか分からない、どういった人たちがいるか分からないから行くのが面倒だということであれば、「この団体はこういう団体でこんな人たちが集まっている」「私たちもついていって紹介しますよ」などと言ってあげれば、行けるのかもしれない。そのように、方策をつくっていかなければいけない。

大切なことは3つあると思う。1つ目に、大きな方向性として、巻き込むのではなく、巻き込まれに行くという発想である。これまでは自分たちがやっている活動に巻き込もうとしていたから、それは嫌だと断られていた。そうではなく、協議会側からアウトリーチして、若者たちの活動や色々なところに出向いていってつながっていく、巻き込まれに行くということが大切である。

2つ目に、相手ができること、したいと思うことをベースにしながらこちらが乗っかって一緒にやっていく、応援するということが大切である。

3つ目に、確実に人を巻き込んでいくためには、個人レベルでのつながりで声かけをしていくということである。SNS等もやったほうが良いと思うが、やはりメディアは不安定な部分がある。確実に人を巻き込んでいくためには、一気に100人集めようという楽をせず、地道に声をかけていくということが大切である。

ロジックツリーの分析をもとにして、いろんな方策を構築できるのではないかという気がする。他にこういったことをやったほうが良いのではないか

など、方策についてご提案があれば伺いたい。

#### 副会長

イベントの人の集め方にも色々あると思うが、やはり最終的には口コミになると思う。会長も言われたように、アナログ的な手法で声かけをしながら集めてくというのが、1番確実だという風に感じている。

#### 委員

皆さんも言われているように、知り合いに声をかけたら、どうしようかなと迷っている人も来てくれたという事例は結構ある。しかし、そうなるといつも同じ顔ぶれがいるというのが現状である。初めて来た人が、知り合いばかりいる中に入ってくると、居心地が悪そうにされている様子は感じる。

バスケットは、全く何の関わりもない人たちが集まって、そこから関係が繋がっていくとすることができる場だと思う。バスケットに参加させていただいた際に、その場で初めてつながった方から、「郷づくりで何かイベント等あれば声をかけてください」と言ってくださったこともある。しかし、郷づくりでは、今までそういったつながりはない。郷づくりでも、バスケットのように、普段関わりのない人たちが集まって、つながれる場があれば良いなと思う。

#### 会長

知り合いが多いところに一人で来るというのはハードルが高い。バスケットのような場で、仲間を持っているような人たちとつながっていくということが1番やりやすいと思う。

あるいは、NPOやいろんな若者たちの集団を訪ねて行き、その団体とつながって、何人かで郷に入ってきてもらう。そこから口コミで広げていくという感じになっていくと良いだろう。

#### 委員

自分の友達や近所の人などの個人レベルの声かけをしても、そこからいざ広がるかと言ったら実際はそうでもない。地域のサークルや郷づくりで行っているサークルに広げていくと、それから広がるかのではないか。

また、参加賞のように、そこに来れば少し何かもらえるというものを見せることも良いのではないか。

#### 会長

キッカケラボではスタンプカードを取り入れており、ポイントがたまったらコーヒーなどをもらえるようだ。

何か別のサークルの人に紹介していくというのは良いかもしれない。やはり声をかけても、その人に声をかけられたら行かざるを得ないという人間関係性がないと来てくれない。となると、どうしても身近な人になるが、いつもと違うサークルの人で、仲が良い人たちに声をかけていくのは良いと思う。

#### 委員

方策ではないが、ロジックツリーの「活動したいと思っているが参加できない」理由には、時間とか負担とか以外にも、そもそもつながるきっかけがないという話もあるのではないかな。

「何かしたいけどどこに行けば良いかわからない」という人もいると思う。そういう人がまず参加できる場をつくるといった内容が入っていると良いと思う。

#### 会長

やはり、今郷づくりでやっていることに参加してくれという仕組みよりも、そこに参加すると色々な楽しいことができるという仕組みに変えていかなければ、来てくれたとしても続かない。

まずは、参加する人たちにとって魅力的な活動に変えていく。そして、巻き込むのではなく巻き込まれにいく、こちらからつながっていくということが大事である。

また、委員も言われたとおり、バスケットのようなつながるきっかけの場は大事だと思う。キッカケラボがそういった場になっているが、地域レベルでも、そこに行くにつなげてもらえるような「関係案内所」のようなものがあったら良いのかもしれない。

#### 委員

キッカケラボには、コネクターがいて、色々なところをつないでくれる。住民自治という観点から、そういうことは自分たちでやるという考えの人もいるかもしれないが、市や第三者的な、つないでくれる立場の人がいると良いと思う。

今はどの部会も人手が足りないため、ぜひ自分のところという思いが皆さん強く、話し合いもできていないように感じる。そこで、コネクターのような方に、「こういう団体がありますよ」とつないでもらえたら良いと思う。福祉に関しては社会福祉協議会が小まめに回られており、私たちも教えてもらったり提案したりしているが、なかなか市のほうからは、そういった提案やつなぐということは、してもらえていないような気がする。

#### 会長

2段階必要なのだと思う。キッカケラボができて、紹介してもらえたりコーディネートしてもらえたりするようになったのは良いことだ。しかし、実際に地域レベルで活動するときには、「それについてはあの人が良いよ」といったもっと細かな情報が必要になる。そのため、各郷づくりレベルでも、そういったチームがあって、紹介してくれたりバックアップしてくれたりする人がいると良いのだと思う。

#### ○柱4の①について

#### 会長

「市のビジョンが明確になっていない」のであれば、市のビジョンを作るしかないが、それが方策として出てきていない。

一番下の段の、「行動を起こすゆとりがない」については、他の団体等に任せるという方策もあると思う。

方策①「職員の基本姿勢の学び直し」とは、具体的に何をどうするのか。研修をするのか、若い段階で地域担当職員を経験するとか、人事ルートの工夫で対応するのかなど、方策を具体的にする必要はある。

方策③「自立支援に向けた外部アドバイザー制度の導入」については、外部アドバイザーには何をどうしてもらおうのかということが書かれていない。抽象的に書かれていると、何をしたらよいか分からず、実行に移せない。ここはどんなことを考えているのか。

#### 事務局

県や地域活性化センターの支援事業を活用して、外からの視点を取り入れることにより、気づきが生まれるのではないかと思っている。

#### 会長

施策としては、具体的に何をどうするのか。

例えば、予算を取ってどういう人を雇って何をしてもらおうのか。

#### 事務局

予算を取り、アドバイザーに外部から来ていただき、市役所職員や地域に対してアドバイスをもらう機会を作る。研修や講座をしてもらうことで、なかなか今まで自分たちで出来なかった課題解決の方法等が見えてくるのではないかと思っている。

#### 会長

今、言われたことは、かなり全般的な話のように見える。市が地域に求める役割が不明確という原因に対する方策について考える必要がある。例えば、なぜビジョンを明確にできなかったのかなどについて、もっと深掘りして考えていかないといけない。

市は地域に対して遠慮があると思う。そのため、書きたいことをストレートに書けず、ぼんやりと書いてしまう。しかし、ぼんやりとしていることで地域側はよく分からず、後の反発につながったりする。地域との関係性が、明確なビジョン作りを躊躇させてきた原因の1つであるなら、「ビジョンの策定自体を、地域と一緒にやって行く」ということも必要なのではないか。

ここに関しては、市のビジョンが明確になってこなかったという原因を、もう少し深掘りしていく必要がある。地域は納得できていない状態で市がビジョンを示し明確にしようとする、当然地域からの反発を受けることが分かっているから曖昧にしている。それが原因ならば、今一度市と地域が対話しながら、この役割自体を、話し合いの中で、お互い納得する形で明確にしていくという方法しかないのではないかと思う。条例制定のプロセスなどを通じてそれをやっていくことが有効なのではないか。その辺りを踏まえ、具体的な方策としては、新たな条例を通じて明確化を図るとともに、その機会を利用して、みんなが納得できるビジョンを再構築するといったことになるのではないか。

行動がとれていないということについては、まずビジョンを明確にした上で、例えば、人材育成方針に求められる行動を明記した上で、場合によっては人事評価制度の項目の中に一定の項目を入れ込むとか、地域担当職員の役割に反映させるといったことが考えられる。そして、足りない部分については、アドバイザー制度でカバーしていくということなのではないか。

#### 委員

言語化は控えているが、ずっと問題意識としてみんなが持っているのではないかということを上げると、郷づくりができて、地域のことは地域で考えて行動するという崇高な目的があるが、それに関わっている人達の思いには、「とはいえ結局やらされ仕事がいっぱいだよね」という部分があるのだと思う。

ある時には「これをやってください」「これは決まっていることです」という言い方をされ、ある時には「皆さんで考えてください」という、ダブルスタンダードの中で苦しんでいるというのはとても感じる。それは恐らく、市役所の人も問題意識としてどこかで持っているのではないかと思う。

不明確なところがあることで、お互いに苦しんでいるのではないか。そのため、ここはこっちが、これはこっちがという振り分けについて双方で話し合い、市と地域で合意を図っていくということが、信頼関係と納得性を高めることにつながるのではないかという気がする。

#### 会長

補足すると、それを1回で終わることができるかどうかが問題で、個人的には、それを回しながら修正していくぐらいの気持ちでも良いのではないかと思っている。

この審議会では各地域を回って色々なご意見いただいたため、こういった改善の機会を毎年や2年に1回は持ち、少しずつより良い形が出来たら良いと思っている。

しかし、条例制定という話になってくれば、そこで1つ大きな機会が生まれてくるため、今、委員が言われたようなことをしっかりやっていくということが大事になると思う。

#### 委員

委員が言われたことは、本当に根っこの部分だなと思っている。それを答申の中に書き込んでいるほうが良いのではないかという気がする。

私もヒアリングして思ったのは、親子関係を例とすると、「あなたはもう大人だから自主・自立して、自分で考えて行動しなさい」と言葉で伝えるが、実は裏では「あなたはこういう行動しなさい」「こういうことやってはいけません」という別のメッセージを出しているのと同じである。その裏のメッセージを地域は感じ取っているのだと思う。

そういう関係性をどう変えていくかということが、今回の全体の根っこになるのではないのか。今の方策では、前半の部分でお金の使い方や場所の使い方については、地域に裁量権がありますよというメッセージは出している。しかし、本当はどこまで地域に裁量があるのかということを見える化

し、整理するということが必要なのではないか。根っこのところでどこかに書き込んでいたほうが良いのではないかと思った。

恐らく、新しく郷づくりに入った人は、どこまで求められて、どこまで自由にやって良いのか分からないのではないか。

会長

私の考えとしては、お金と場所の部分について緩和することは絶対に必要であるということ。しかし、根本的に変えるべきは恐らく事業である。今はその部分を交付金でやっているが、本来ならば委託でやるべき部分である。そうした時に、委託を拒否されたら事業は出来なくなってしまうため、交付金で行っているのだと思う。ただそうすると、交付金だから拒否できないように感じ、結局やらされ感が出てきてしまう。

予算があれば委託が良いと思うが、それが難しいという中でできることとすれば、お金と場所の部分の緩和と、交付金の部分をより良い状況に少しずつ改善するというところぐらいだと思う。ここを一気に変えるというのは、短期的には難しい部分があると思う。それ以外の普段のやりとりの中で、押さえつけるようなメッセージを発している部分は、改善しなければいけないと思う。

委員

今までダブルスタンダードで両方のメッセージを伝えていたが、これは一方のメッセージとして、今後、自主・自立というところを長期的に作っていくといったことを、答申の全体の課題のところに書き込めれば良いのではないか。

会長

ぜひそれは書き込んでいきたい。

○柱4の②について

会長

地域との対話が難しい要因には、協議会からの要望になりがちで、市としても積極的になりにくいというのが、根本にあるのではないか。そうならないためには、これまでの代表者会議のようなものとは別に、改善のための場を設けるとか、場面を切り分けていくというのが、最も重要な方策だと思う。しかし、それが方策に挙がっていない。

事務局

方策の中では直接見えないが、具体策のDの中に、「年に1回、協議会と市が未来志向で対話する場を設定し、意見交換を行う。」と「なお、地域から市への要望等については～工夫する。」というのを入れている。

会長

今の代表者会議とは別に、年に1回対話をする場と、第三者機関が介入する場の2つの場を設けるという意味か。



事務局

おっしゃる通り。ただ、この2つの場はセットにして書くのか、分けたほうが良いのか分からない。

会長

そこが分けられるかどうかということだと思う。未来志向で対話する場が色々なことがネックになって出来ないということになれば、その場は要望の場になってくるのではないか。

まずは、代表者会議の位置づけを明確にすることが大切である。代表者会議の場が、要望を言う場だと認識されてしまうと、要望を聞いてもらえないという不満が出てきてしまう。一方で、代表者会議で扱わない機能があるならば、別の場をきちんと設けて、代表者会議と切り分けていくべきだと思う。

委員

代表者会議以外に、地域の人と市が全体で対話するような場はあるのか。

事務局

ないと思う。

委員

審議会で他の地域の郷づくりにヒアリングに行ったことで、郷づくりの認識に対しても、郷づくりごとに違いを感じた。

私も代表者会議に出ているが、対話をしているという感じは一度も感じたことはない。ほとんどが、市からの依頼事項を聞き、それに対しての質問をしたり、地域側が市に対する要望や意見を言ったりといった一方通行の場になっている。

また、各地域で男女1人ずつが望ましいと書いてあるが、今、女性は2人だけで、ほとんど男性が中心である。そういう点では、女性の割合がもう少し多ければ、また違った意見も出るのではないかと思う。

地域から2名出席することになっているが、欠席する場合は、代理出席が認められていない。せめて、他の役員が出席できるようになれば良いと思う。代表者会議の形は、ぜひ見直していただきたい。

会長

代理出席が認められていないのはなぜか。

事務局

明確な根拠はないが、当初、代表者会議が始まる前の準備会の段階で、協議会の意見を聞きながら運営のやり方を決めていったようだ。その際の考え方が、今も要綱上に残っているようだ。要綱上なぜ認められないのかという明確な理由は引継ぎを受けていないが、当時は、代理は認めないということで始まったようだ。

以前、次期候補者を年度最後の代表者会議と一緒に参加させたいという要

望が出たことはある。その際、発言権は持たず、あくまでオブザーバーとして参加していただいたことはある。しかし、委員の代理出席を認めないことは踏襲しているため、この辺りは見直しても良いのではないかと思う。

会長

やはり不満の声は、その場で挙げたいというものはあるだろう。だからそれは、審議会のような場で行っていただくようにしていく。かといって、一方的に市の情報を伝えるだけの場に来ていただくのはどうなのかという感じはする。情報伝達だけであれば他の方法がありそうだ。

事務局

要綱上の審議事項には、一応、情報伝達も含まれている。会議の最も大きな目的は、地域間の情報交換となっていたが、いつの間にか行政側の情報提供が主になってしまっている。

また、会議は90分を目安としており、必要な行政側の情報提供をした後、地域間の情報交換をするという形になっている。本来は、地域間の情報交換をした上で、行政から情報提供があればどうぞという順番が正しいのではないかという認識はある。しかし、行政側が事務局をやっているため、色々な部署を呼んで説明をさせてもらうというのを優先させてもらっているところがある。

会長

情報伝達は別ルートにしても良いのではないか。  
代表者会議は1回90分で、毎月開催しているのか。

事務局

原則、年5回開催している。

会長

もう少し回数を減らし、1回3時間ぐらい取ってじっくり話し合っても良さそうだ。

実際に代表者会議に参加される方はどう考えるか。

委員

皆さん不満が溜まっているようで、どうしても不満のぶつけどころになってしまっている。

また、定例の市からの依頼事項について、郷づくりからこうしてほしいという要望が出て、そこに対して何も改善がされないまま翌年も同じような依頼事項が市から出ているということも、不満がたまる要因ではないか。本来はもう少しお互いに歩み寄って、良い方策を考えて進んでいかなければいけないのに、それができないまま今までずっときているように感じる。

また、郷づくりの会長が変わったりして、郷づくりの中での引継ぎが上手くいっていないことも要因としてあると思う。

結局、市は市の要求、郷づくりは郷づくりの要求を言い合うだけで終わってしまい、建設的な話し合いは全くできていないと感じる。

会長

機能としては3つ必要なのだと思う。

1つ目は、問題状況改善の場。2つ目は、行政側から地域に伝える場。3つ目は、地域同士の話し合いの場。このように機能を分けていくことが大事だと思う。

1つ目の場を市が直接やるのは大変なため、こういう審議会的な場を活用していただくというのが良いと思う。解決策を行政側で考えてくださいうのも難しいため、第三者機関が入ったほうが議論しやすいと思う。

3つ目の場である横のつながりについては、これまで議論してきたように、1つは自慢大会のように、やっていることを年に1回発表し合う、ノウハウを共有し合うような場を設定すること。もう1つは、各郷づくりを訪問するような機会を仕掛けていくということであろう。

2つ目をどうするかが残っているが、市からの情報伝達を、一堂に集めてやらなければいけないのかという感じがする。行政の効率的には、一堂に集まってもらい、色々な課がその場で説明をして、質疑応答までできれば楽であると思う。しかし、そのためだけに集まってもらうのは申し訳ない感じがする。課ごとに説明に行っていくのは大変か。

事務局

連絡調整の場としては、別途、事務局レベルの会議（事務局員会議）を月2回開催している。事務局への連絡で良いものは、市の担当課に事務局員会議に来てもらい、事務連絡ということで事務局の方へお伝えしている。

一方、例えば防災訓練のように、市が全地域に対して挙げているような、少し重たい議題のものに関しては、代表者会議で連絡・調整をするということにしている。ただ、それが事務局員会議での連絡・調整では駄目なのかというと、そうではないかもしれない。

しかし、先ほどの代表者会議の代理出席ができないという話ともつながるが、代表者会議には、先ほど出てきた自慢大会のような場や、研修の場、情報を共有する場といった色々な機能を盛り込んでいる。以前は、2名の委員以外の人を呼ぶときは、実践交流会と言った、部会の人だけ集めたような場を別に設けていたことがある。しかし、代表者会議以外にそれだけ多くの方に集まってもらうということが難しく、実施しなくなったため、代表者会議自体の機能が全く活かしきれていないという現状がある。

代表者会議を始めて10年経過しているため、この代表者会議の中身を見直す段階に来ているのかもしれない。

会長

今の話聞くと、やはり事務連絡については、全て事務局員会議で行っても良いのではないか。

委員

全てがそうではないが、郷づくりの役員の間でも、「あの内容は事務局員会議で良かったよね」という話もあっている。また、「これは郷づくりが個

別に市に話せば終わることなのではないか」という内容も、代表者会議の共有の席で質問され、その内容に割と長い時間を取ることもある。

要綱には、「代表者会議はこういう目的でこういう場である」ということが明確に書かれていると思うが、それについてしっかりと説明を受けた覚えがない。市長や副市長が同席することが多いため、地域同士が話すというよりは、市長に意見や要望を言っているという感じの人も多々見受けられる。本来の目的は、明確にするべきだと思う。

以前、私が代表者会議で、部会レベルの交流会や研修をしたいと提案したことがあるが、他の郷づくりの会長からは、部会の人にそんな労力はかけられないと言われた。私の郷づくりでは、「他の郷づくり地域の方たちと一緒に研修などをやりたい」という声は割と聞く。今は郷づくり同士の横のつながりに関することがあまりできていない。特に防災や広報、福祉などは、部会員同士で話し合える場を設け、つながりを強めていってもらえたらと思う。

#### 会長

代表者会議に色々な機能を求め過ぎて機能不全に陥っており、期待されている機能が果たされなくなっている。やはり、郷づくり同士の横のつながりの場、市への要望の場、市からの伝達事項の場は明確に切り分けていったほうが良いのではないかな。

研修の話については、根っこの考え方を変えていったほうが良いと思う。もちろん市が働きかける研修はあっても良いと思う。他方で、全郷づくり協議会が必ずしも参加しなくても、いくつかの協議会が開催を希望しているなら、開催してしまうような研修のあり方もあって良いのではないかな。例えば、8つの郷づくりのうち、3地域が手を挙げたら連携してとりあえずやってみる。参加するかしないのは郷づくりの自由で良い。やりたいと言っているところについて、市がバックアップするという建付けの研修があっても良いのではないかな。

#### 委員

全体に言えることだが、全体の目的と手段の部分を、もう少し整理する必要があるのではないかな。

対話というのは、拠点の使い方やお金の使い方に並ぶ重要な内容だと思う。一方で、何のための対話なのかというのを考えると、今回の提案は、個別の課題に対してどう対応するかを考えている段階だと思う。

全体として、どうすれば地域が本当の意味で自主・自立的に動くのか。仕組みの面、制度の面、活動の面、気持ちや心の面に対し、どういった市の支援や改善があればその状態に持っていけるのか。そのための手段として個別のアイデアがあると思う。

仕組みや制度に関しては、拠点やお金に関することが手段になり、活動に関しては、市が地域の担い手をつくる支援をするというのが、柱3に関わる手段ではないかな。

気持ちや心の面に関しては、やらされ感があるというところが、本当の意味で心の自主・自立になってないのではないかな。先ほどの話に関連して言え

ば、地域の要望や不満を話す場、自慢大会などは、全体の自主・自立の状態をつくる上でどこに位置づけられるのか、全体の目的に対して、それぞれのアイデアが必要なメニューとセットになっているみたいな考え方や整理が必要なのではないかと思った。全体に紐づけていくといった発想が必要かもしれない。

会長

全体に紐づけていくというのは、とても大事な視点だと思う。

個人的には、対話とは、答えが見えないからこそ、それを模索していくためのものという感じがする。これまで、こうあるべきだというものに、なんとなく合わせてもらうという感じだったものを、見えない答えあるいは形のない答えを、対話を通じて一緒に作り上げていくという感じではないかと思う。

○柱4の③について

会長

地域担当職員の位置づけは、「位置づけは大まかにあるが明確ではない」と「位置づけはあるが不明確に見える」とでは、現実的にどちらと捉えているのか。

事務局

地域担当職員制度に関する要綱に、役割や位置づけが書いてある。事務局としては、「位置づけはあるが不明確に見える」と捉えている。

会長

そもそも、地域担当者の位置づけが不明確とは、具体的にどういうことか。

事務局

地域からよく聞くのは、地域担当職員に「何を求めて良いか分からない」「何をどこまで相談して良いか分からない」「どこまで関わってもらって良いかが分からない」という声である。

確かに、要綱上に地域担当職員の職務というのは書いてあるが、それだけでは読み取れない部分が多くあるのではないかと感じている。例えば、要綱上には、地域に必要な情報提供、苦情の適切な把握、地域の自立や活性化のための助言といった書き方がされており、具体的ではない。実際、担当地域の活動のお手伝いという気持ちでいる地域担当職員もいると思う。それが本来の地域担当職員の役割なのかと疑問に思うときもある。

会長

今の話だと「位置づけは大まかにあるが明確ではない」の方かと思うが、そもそも「位置づけは大まかにあるが明確ではない」と「位置づけはあるが不明確に見える」は、日本語として同じことを意味するのではないか。

まずは位置づけを明確にする必要があるが、明確にした上で、地域と文言

を確認し合っていくという作業が大事である。例えば、「こんなことはしないでください」という出来ないことを明確にすることはできると思う。そして、してはいけないこと以外はとりあえず要望していただくという事で良いのではないかと思う。つまり、位置づけが不明確というのは、書き方が抽象的で、何をしてはいけないかということが明確でないということだと思う。

地域担当職員は2種類あるという認識で間違いないか。

#### 事務局

おっしゃる通り。管理職級の地域担当職員と、入庁5年目から7年目の研修職員の2種類がある。

#### 会長

それぞれの役割が違っているのであれば、してほしいことと、してほしくないことの両方が明確だとやりやすいのかもしれない。

他の自治体では、地域担当職員制度を入れる際に、地域と行政が協定を結び、「ここからは要望しないでね」というのを明確にしている。それは恐らく、協定を結ぶということが本質ではなく、協定を結ぶ中で対話をして、お互いに一定の線を合意しておくということにポイントがあるのだと思う。

#### 委員

地域担当職員とは別に、地域コミュニティ課にも、各郷づくりの担当の職員がいる。そのため、どちらに何を言ったら良いか分からない。

地域担当職員の管理職の方からは、「まだまだ入庁して間もない研修職員には、地域の状態を見るために、行事などで一緒に関わってもらいたいことがあれば、ぜひ声をかけてあげてください」という風に言われているため、こちらも頼んだりしている。地域担当職員の方とも、関係性は出来ていると思う。先日もお願いをしていなかったが、イベントの際に、「家が近くだから」と言って見に来てくれて、手伝ってくれたりもした。

関係性は出来ているが、実際どういうことをどこまでお願いしたら良いのかというのは分からない。どちらかというところ、地域コミュニティ課の担当者にも、よく相談をしている。

#### 委員

私の地域は、色々な頼み事は全て集約して、地域担当職員に連絡をしている。また、月2回ほどの役員会議には、必ず地域担当職員に会議に出席してもらっている。その際に、市から郷づくりに情報をいただいたりしている。イベントでお手伝いが必要なときは、地域担当職員の責任者へお願いをしている。

#### 会長

地域コミュニティ課と地域担当職員の仕分けについても、考えなければいけないことの1つであろう。

繰返しになるが、例えば、「広報を作るのに人がいないから手伝ってくれ」とか、「事務局の手伝いをしてくれ」というところまで要望されると大変

なので、「そこは要望しないでください」「そこはできません」ということを言う必要ではないか。一方で、研修職員に関しては、「こういうことをぜひ経験させてほしい」というのを具体的に要望していくことが必要だろう。

また、地域コミュニティ課と地域担当職員には、どちらに何をどこまで要望するのかということがルート化されると分かりやすいのではないか。どちらに相談しても良いという体制が整えられるのであればそれでも良いと思う。

研修職員は、研修期間が終わった後も地域とつながっているのか。

委員

つながっていない。単発的である。

会長

それは非常にもったいない。毎年関わる人材が増えていくはずなのに、その部分に対する手立てを打っていないというのは見直した方が良い。

例えば、ちょっとした卒業式をするなどして地域側が可愛がってあげながら、「これからも地域の仲間だからいつでも来てね」「こっちも声かけるね」といった形でつながりを継続していけば良いのではないか。

委員

今来てくれている研修職員の研修期間がいつまでなのかという情報は、全く知らされていない。

会長

研修期間がいつまでなのかは、はっきりと示してあげるべき。地域との関係をつくる上でも必要だと思う。

委員

一方で、声を掛けたら研修職員の負担になるのではないかという心配はある。

委員

イベントが土日に多いため、遠慮している部分はある。市からは、それも仕事のうちということを言われているが、郷づくり側としては実際その辺も考えてしまう。

会長

郷づくり側の姿勢も変えたほうが良いかもしれない。

私のゼミ生は、島根県安来市の山奥に2か月ほど1人で行ったことがあるが、地元の方にとっても可愛がっていただいて、今も第2の故郷のような感じで行ったりしているようだ。やはり、そうやって可愛がってもらえたら本人も嬉しい。

仕事の範疇を超えた時には、あくまで個人だから強制ではないが、「自分たちは大事に思っているから、できればこれからも付き合っね」という感

じで関係性を作っていけば良いのではないか。

研修職員に関しては、もう少し工夫すれば上手くできるのではないかという気がする。単にイベントのお手伝い要員として考えず、温かく育ててあげることが大事なのではないか。

#### ○柱4の④について

##### 会長

恐らく、段階に応じた伴走支援をする、一律に扱わないということが重要なことの1つだと思う。伴走支援が出来ていない原因として、情報提供や助言が出来ていないといった要因もあるが、「段階に応じた」という発想が欠けていることも要因としてある気がする。

立ち上げる時だけ手助けをして、あとは自分たちでやってもらうではなく、いつまでも支援はする。ただし、段階に応じた適切なアドバイスをしていく。今回のヒアリングで、地域によって進捗度合いが違っていると感じた。それぞれの進捗度合いに応じた支援が必要である。

一方、地域が自立して自分たちでやっていくものとして考え、市が関わりを持たないという発想は根本的に変えるべきである。

##### 委員

話題提供させていただくと、現在キッカケラボの事業で、キッカケラボに登録されている団体や、これから何か新しいことをしようとしてくださっている方々に対して、評価指標を考えるということをやっている。

その評価指標とは、いわゆるジャッジして点数をつけるものではなく、自己評価をしながら、「今、自分たちはどの辺にいたのだろうか」「自分たちの理想に対して何が足りないのだろうか」ということを自己評価したり、相談にこられた方とキッカケラボの方々が一緒になって、「ここが足りてない」とか「ここは上手くいっている」ということを段階ごとと一緒に考えたりできるものである。

郷づくりの今の状況というのは、まさにその評価指標を使っていけるのではないかという気がしている。

##### 会長

地域運営組織に関する自己診断書のようなものは、一応開発されてはいらる。それをういて、どこがどう遅れているのかというのをチェックして、そこに手を差し伸べるというふうにするべきだと考えるのが、小規模多機能ネットワークの議論である。しかし、結構きっちりとし過ぎている部分があるため、もしかしたらキッカケラボの評価指標の方が良いかもしれない。

そういった仕掛けを使って状況を自己診断しながら、状況を共有して寄り添っていくというのが基本になる。地域カルテとは別に、協議会自体のカルテをしっかりと作り、それに応じて市がバックアップしていくということになるのではないか。地域が自立できる環境・条件を作っていくというのは、行政の責任として放棄してはいけない。



○柱5の①について

会長

方策には、これまで他の柱で方策として挙がってきたものが改めて出てきている。ほかに、皆さんのアイデア等あれば伺いたい。

委員一同

特になし。

○柱5の②について

会長

以前から申し上げているとおり、自治会加入促進のためのパンフレットの作成や配布というのはあまり効果がない。自治会加入に関しては、不動産業者と協定を結ぶということが、加入率自体を高める上では有効的と思われる。しかし、一応自治会のメンバーとしてお金は払うが、何も活動に参加しないということは有り得る。

福津市は、不動産業者と協定などは結んでいないのか。

事務局

協定は結んでいないが、開発協議の指導要綱に、業者に対し、入居者へ自治会加入を促進する、お願いのような文言は入れている。

会長

協定まではいかなくとも、そういった強めにお願いをする文言は必要だと思う。

私が住んでいる宿舎では、自治会長の仕事内容を全てリスト化して、この仕事は別の役員が引き受けたほうが良いのではないかとといった割り振りを行った。まず、自治会がどういったイベントをしていて、どういった会議が何回あるのかということ洗い出し、これはもうやめようかという話し合いをして、全体の内容を見直していく。そういった見直しができたら、「この部分の仕事については、誰々にやらしてもらおうか」という限定的に関わりしるを作ることができる。

運動会の中に防災訓練にもつながる内容を入れ込むことで、運動会と防災訓練というイベントを1日で済ませたり、会議の日を調整して同じ日にやったり、そういう工夫がどれだけできるかがポイントだと思う。それを、自治会の方々だけでするのは大変なので、キッカケラボや第三者が入って整理してあげるということをやれると良いのではないか。

委員

私の地域は、加入率は高いが、高齢化率も高い。高齢化で役員が出せない地域からは、「組ごと自治会を抜けようか」という声が挙がっているようだ。

また、今までは自治会に入っていないと分別収集には出せないと思っていたが、市に問い合わせたところ、そうではないという返事もらったため、

入らなくても良いのではないかと考える1つの要因になっている気がする。

特に若い人は、自治会に入っているメリットが感じられないということもあると思う。また、個人情報の管理が厳しくなり、市から名簿が出なくなったことで、何歳の人がどこに何人住んでいるのかという情報を集めることが難しくなり、そこに関する役員の負担が増えているというのも、自治会に入らない、抜ける要因の1つではないか。

先ほど話が出たように、業務委託のような形で、自治会の仕事まで地域で見てもらおうという発想も必要になってくるのかもしれない。自治会の役員選で人間関係が悪くなっているような気もする。

以前は、高齢者だから役員ができないという理由が通ったが、今はその理由は通用しなくなっている。自治会が主軸となり、地域をまとめるのが郷づくりという今の形がどこまで続くのだろうという疑問は個人的にある。

若い人が多い日蔭野の辺りは、加入率は低いのか。

#### 事務局

自治会による。賃貸住宅やマンションが多い地域は、加入率が低いように感じる。

#### 委員

今後の自治会の在り方は考えていかなければいけないと思う。

#### 委員

私は、細く小さくでも自治会は必要だと感じている。地域のつながりやコミュニティは、これから先、特に必要になってくるのではないかと思う。

私の地域は、当初の自治会費は1,000円だったが、800円に減額され、更に高齢者が増えてきたこともあって数年前に500円～600円に減額になった。自治会費の徴収方法も、毎月の徴収だったものが年に1回の徴収に変わった。また、今年は、大きなイベントをする際に、回覧でボランティアの募集チラシが回ってきていた。全てを自治会の役員が担わなくとも、若い方や元気な高齢者がボランティアとして参加されていて、イベントが開催できたようだ。

そのように助け合っていくというのは、地域においては絶対に必要なことだと思う。これが郷づくりにそのまま取り入れられるかは分からないが、年齢を重ねても、人と人の関係性が広がっていく機会というのは大切にしていけるものではないかと感じている。

#### 会長

恐らく、自治会を維持できるならば、維持していったほうが良いというのは皆さん思っておられる。しかし、役員の負担というのが自治会をやめるきっかけとなり、持続できなくなっている。委員が言われたように、将来的に、協議会がその部分の委託を受けるという方向性は、十分に有り得る選択肢だと思う。

例えば、私の宿舎では、自治会長を決める時にくじ引きをしている。くじ引きに参加しない場合は、1人12,000円払わなければいけないと決まっ

ている。こんな額を払う人はいないと思っていたが、他にもいろいろ免除条件があってそこに該当する人がいるということもあるのだが、約150世帯のうち、実際にくじ引きに参加するのはわずかで、くじ引きがどうにか成り立つ程度の人数にとどまる。自治会活動に参加はできないが、自治会を維持するためにお金は出す人はいる。その資金で協議会に委託し、協議会を構成するどこかの地域の人たちが中心となって運営してあげるというのは方法として有り得ることだと思う。今後はそういったやり方も考えていかなければいけない。

協議会の在り方は、自治会の延長線上で描くパターンと、自治会とは別に攻めていくパターンの2通りある。しかし、自治会とは別に攻めていくパターンであったとしても、将来的には、弱くなっていく部分をカバーしていかざるを得なくなり、両方やっていかなければならなくなるのではないかという気はしている。

#### 委員

余談にはなるが、現在キッカケラボでは、ウェルビーイングを、どのよう  
にまち全体で向上させていくかということをしている。自治会の活動は、誰かのためと頑張っておられる方の支えで成り立っているような厳しい状況もあるのではないかと思う一方で、捉え方次第なのではないかとも思う。

以前、西南学院大学でウェルビーイングをテーマに行った市民講座で、これをしている人は幸福度が高いといった内容の話をした。講義に参加された50歳ぐらいのパートの女性が、その翌週の連続講座に来られた際に、パートで色々な荷物を運ぶ仕事に対し、ほかの人にやらされているという感覚でいやいや仕事をしていたが、講義を聞いてからは、荷物を運ぶことで健康にもなるし、お金も稼げるし、パート同士のつながりもできて、やっていることが全て自分にとって得になっている、という考え方に変わったと言っていた。

ウェルビーイングのような考え方が広まっていけば、自治会活動に対しても、「自治会活動をすることで自分の幸福度の向上に直結するな」という思考になり得るのではないか。「やらされ感で時間を使っている人は幸福度が低いが、自ら目的意識を持ってやっていることは幸福度が高い」というような考え方が自治会や地域に広がっていけば、自治会活動に対する意義や考え方も変わってくるかもしれない。

#### 会長

おっしゃる通りだと思う。地域のことは自分がやらなくても誰かがやってくれるという考え方ではなく、発想転換をしていくことが大事である。ただ、そういった考え方を広める研修や講座を受けてくださる方は良いが、そうでない方の思考を変えていくには、何かしら仕掛けが必要になるだろう。

#### 会長

ロジックツリーに関して、他にご意見等が無ければ、あとは正副会長及び事務局で修正したものを見させていただくこととする。

### 3. 「福津市みんなですすめるまちづくり基本条例」の概要について

#### 事務局

資料1～4について説明。

次回の共働推進会議の場で、具体的な内容の検討に入っていく。次回の会議までにお渡しした資料に目を通してきていただきたい。

#### 会長

委員の皆さんには、次回までに資料1～3に目を通しておいていただくようお願いする。その上で、条文改正の必要性について内容を検討していくこととする。

事務局には、次回の会議の際に、伊賀市の条例を用意しておいていただきたい。

### 4.その他

#### 事務局

今回は、令和6年1月12日（金）の14時から、市役所大会議室で開催する。以上で本日の会議は終了とする。